大原の里と比良の山

大原のオオムラサキを守る会
蓬　莱　む　し　の　会
第 30 号　2026.9.10

大原とびわ湖バレイ　山を越えてつながる自然といのち

大原のオオムラサキを守る会

京都市左京区大原の里と、大津市西部の比良山系に広がるびわ湖バレイ周辺は、行政区分こそ異なるものの、比叡山から比良山系へと連なる山々によって結ばれた、深い歴史と豊かな自然を共有する地域である。大原は京都盆地の北東端、標高約 200～300m の盆地状の地形に集落や田畑が広がり、その背後には標高 1,000m を超える比良山系の山並みが連なる（**図 1**）。なかでもびわ湖バレイは打見山（約 1,108m）や蓬莱山（約 1,174m）を中心とする高原地帯であり、琵琶湖を一望する雄大な景観と、冷涼な気候が特徴である（**図 2**）。



図１　大原草生町の田んぼからみるびわ湖バレイ方向の眺め

両地域は直線距離では 10 数 km ほどしか離れていないが、標高差は 800m 以上に及び、気候や植生には大きな違いが見られる。大原は京都盆地特有の内陸性気候の影響を受け、夏は蒸し暑く、冬は放射冷却による厳しい冷え込みや積雪がある。一方、比良山系では日本海から流れ込む湿った空気が山地で上昇し、多くの雨や雪をもたらすため、冬季には深い積雪に覆われる。こうした気象条件の違いが、それぞれに特色ある自然環境を育んでいる。



図２　びわ湖バレイ　蓬莱山山頂から大原方向の眺め

この地域は古くから「鯖街道」と呼ばれる交通路によって結ばれてきた。若狭で水揚げされた海産物は、比良山系西麓を南下し、途中町で峠を越えて大原へ入り、さらに市中へ運ばれた。人や物資だけでなく、文化や信仰もこの道を通じて往来し、山を隔てた両地域は密接な交流を続けてきた。

また、比叡山延暦寺を中心とする天台宗との関わりも深い。大原には天台宗ゆかりの寺院が数多くあり、比良山系にも修験道や山岳信仰の舞台となっている明王院（大津市葛川坊村）や天台比良修験道々場（大津市木戸、**図 3**）などが点在する。山は人々に恵みを与えると同時に、祈りの対象でもあり、その豊かな森林は今日まで多様な生きものを育み続けてきた。

昆虫の世界に目を向けると、両地域には豊かな森林や渓流環境を利用する共通種が数多く生息している一方で、地域性も顕著である。大原の里山や水田では、ゲンジボタルやヘイケボタル、ナツアカネ、アキアカネなど、人の営みと結び付いた水田や水辺の昆虫が豊富である。びわ湖バレイの渓流沿いではヒメアカネやミヤマサナエ、森林ではエゾハルゼミやミドリシジミの仲間、草原にはウスバシロチョウやルリボシヤンマなど、冷涼な環境を好む昆虫が見られる。また、びわ湖バレイの高原（**図 4**）では、より標高の高い草原やブナ林に適応した高地性の昆虫が生息し、低地では見られない種と出会うことができる。標高や気候の違いが、昆虫相にも明確な個性を与えているのである。

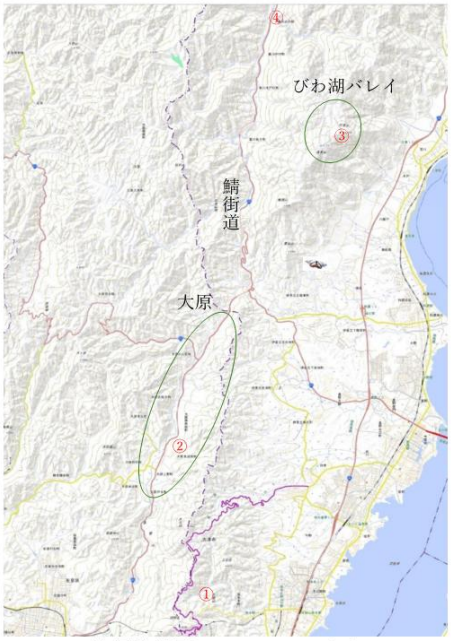


図３　びわ湖バレイ打見山山頂直下の天台比良修験道々場



図４　びわ湖バレイ ダイナミックコース
（標高：約 1,000m）

地理的には近接しながらも、多様な自然環境を有する大原とびわ湖バレイ（**図 5**）。この二つの地域を比較することは、地形や気候、人々の歴史、そして昆虫たちの暮らしが互いに深く関わり合っていることを理解する絶好の機会となる。本特別展示「大原とびわ湖バレイの昆虫」では、両地域の自然環境と昆虫相を対比しながら、その共通点と相違点を探り、山を越えてつながる生物多様性の豊かさを紹介したい。（文責：的場亮一）



地理院地図　GSI Maps　より

図５　大原とびわ湖バレイ周辺

① 比叡山延暦寺

② 三千院

③ 天台比良修験道々場

④ 明王院

注：

1. この「大原とびわ湖バレイ　山を越えてつながる自然といのち」は特別展示「大原とびわ湖バレイの昆虫」（2026 年 7 月 18 日～8 月 2 日、於：大原文化センター）の展示パネル前文にあたるもので、これ以降の展示パネルの内容は順次紹介する予定である。

2. 左の地図上に記した記号や楕円は、およその位置を示すもので、精確な位置や行政区分を示すものではない。

セブンイレブン記念財団「2026 年度環境市民活動助成フォーラム」報告

奥谷　功

セブンイレブン記念財団「2026 年度環境市民活動助成フォーラム」が 2026 年 7 月 31 日（金）に東京で行われた。大原のオオムラサキを守る会を代表して、会長の小松と副会長奥谷が参加したのでここに報告する。

【日時】2026 年 7 月 31 日（金）13:00～16:00
【会場】ベルサール東京日本橋　（東京都中央区日本橋 2-7-1　東京日本橋タワーＢ2）
【参加団体】2026 年度環境市民活動助成採択団体　253 団体
【参加者】大原のオオムラサキを守る会　会長　小松清弘、副会長　奥谷功
【プログラム】
〈第 1 部〉
13：00～　開会　　専門審査員紹介、セブンイレブン記念財団役員紹介
13：15～　開会挨拶　セブンイレブン記念財団理事長　太田敏夫
13：17～　セブンイレブン記念財団紹介動画
13：25～　基調講演　自然環境研究センター副理事長　渡辺綱雄氏
「ネイチャーポジティブを通じて自然共生社会の実現へ」
○2010 年に名古屋で開催された生物多様性ＣＯＰ10 で、「人と自然の共生」を長期目標に掲げた愛知目標が採択された。12 年後、ＣＯＰ15 で新たな世界目標、昆明モントリオール生物多様性枠組が合意された。引き続き「人と自然の共生」を長期目標に掲げると共に、生物多様性の悪化を止めるだけでなく流れを逆転させて、自然を回復の軌道に乗せるネイチャーポジティブが 2030 年までのミッションとなった。その実現の鍵は、社会全体の協働コレクティブアクションである。本日はこうした国際的な動向を踏まえ、今後の方向性を考える。
○最近の事例の紹介
①　京都亀岡保津川公園の整備・保全
アユモドキ他の動植物の保全
②　能登復興支援国際シンポジュウム
トキの放鳥推進、能登の里山里海の生物多様性
③　近江舞子
ハマエンドウの生育地の保護
14：05～　地域団体活動発表
①　大阪府　スミレ・花フレンズ
「花いっぱいの町づくり」　種花事業（種まき, ポット上げ, 各地へ配布し定植管理）、共同事業（地域に於いて講習会, 収穫祭, 花見, フラワーロード）
②　三重県　森の風
「まちのきこり人育成講座」　活動場所（三重県 2 町 2 市　12 か所の里山）、講座（きこり体験、森をはかる、チエンソーで伐る）
③　大分県　フードバンク彩鳥

「人、食品、地域をつなぐ」　フードバントリー開催（寄付された食品を集め、必要としている人に無償で届ける)、こども食堂へ寄付、地域との信頼関係

④　北海道　ストディングネットワーク北海道

「北海道のイルカ・クジラ漂着情報の収集・調査・研究」　北海道全域の情報収集・調査ネットワークの構築、現地調査標本採集、研究機関へ標本提供、環境教育（講演会、教材制作)、行政支援

14：30～　休憩　　（専門審査委員コメント投影）

名刺交換、各団体との交流

〈第 2 部〉

14:55～　分野別交流会　16 分科会

（司会）セブンイレブン記念財団事務局長　田村清一

（同席）セブンイレブン会長　伊藤順朗

（16 分科会参加団体）

関西ケリ研究会、ＳＡＮ～ＩＮやすぎオオサンショウウオの会、森林緑地菌類研究所、ほうふ里海づくり協議会、大原のオオムラサキを守る会

○交流会トークセッション

①　自己紹介

・関西ケリ研究会；京都府南部におけるケリの個体数と分布調査、繁殖状況調査、ケリの標識調査と個体識別調査、勉強会の開催

・ＳＡＮ～ＩＮやすぎオオサンショウウオの会；島根県安来市周辺でオオサンショウオの生息調査、個体登録の推進、子供向け観察会やイベントの開催、環境保全活動

・森林緑地菌類研究所；滋賀県甲賀市を拠点、菌類を利用した里山づくり、希少植物の保全、啓発活動

・ほうふ里海づくり協議会；山口県防府市において、海や沿岸の環境保全と再生、里海を通じた学び交流の場づくり

・大原のオオムラサキを守る会；オオムラサキ・地域の自然を保全

②　工夫してうまくいったこと、共有したいこと

③　失敗したこと、これから挑戦したいこと

④　アドバイスや意見を聞いてみたいこと

＊後継者問題、若者を増やす件が共通課題となった。

15：55～　閉会辞　セブンイレブン会長　伊藤順朗

・店での募金、オーナーの力が自然に対する活動となった。

・発表してもらった 4 団体へのお礼

・地域に根ざした活動がよく分かった。

・草の根運動が地球環境を動かした。

・今年初めてこのような交流会を開いた、共通の悩みを知り今後活性を。

・助成金の支援のみならず活動を共有していただきたい。

16:00　閉会

コウノトリを追って、自然を想う

的場 亮一

今年の７月１日、知人からの連絡でコウノトリが大津市和邇に来ていることを知り、さっそく観に行った。コウノトリを目にするのは何年ぶりだろう。今回は我が家から車で 10 分ほどの JR 和邇駅の北東約 150m の田んぼの中。このコウノトリはその後しばらく滞在していたのでほぼ連日観に行った。

その事は最後に触れることにし、まずは私のコウノトリ「追っかけ」のいきさつを、日記代わりの自分のブログを読み返し当時を思い出しながら時系列で紹介する。

野外で初めて見たのは 2015 年 4 月 25 日、高島市マキノ町小荒路で。前夜に知人からコウノトリが高島市に来ているとの連絡があり、翌朝さっそく湖北野鳥センターに電話で尋ね、飛来している可能性のあるおよその地域を教えてもらい、ウキウキしながら現地に向かった。いる可能性のある地域の田んぼを通る道路、約 4km 弱の区間を、左右キョロキョロしながら 2 往復したが、見つからず。あきらめかけながら、トロトロとわき見運転で最後のチェックをしていたら、それらしきものが目に入った。すぐに車をとめて双眼鏡でみるとまちがいなくコウノトリだ。いつ突然飛び去るかもわからないので、とりあえず車をおりて直ぐに一枚撮った。その最初の一枚がこれだ（図 1）が、２羽写っているのだがこの紙面ではほとんど点にしかみえない。その後近づいてみるととても堂々として大きくて、初めてみるコウノトリについつい大興奮しながらたくさんの写真を撮った。とても気が合うのか、仲良く並んで田んぼで採餌中の 2 羽（図 2）。



図１　２羽が中央付近(明るい)に



図２　仲よしの２羽



図３　高度を上げていく

この 2 羽のコウノトリとの出会いですっかりコウノトリ・ファンになってしまい、その後の私の「コウノトリ追っかけ」につながった。

その二日後、また会いたくなり、前回見かけた場所に再度いってみた。今度はいくら探しても見当たらずで、もう他のどこかへ飛び去ったのかと、半分あきらめながら、トロトロとわき見運転で最後のチェックをしていたら、なんと道路脇のすぐそばに一羽を発見。しかし近くに車を停車し、カメラをもって戻ったらすでにいない。そのあとまた 4km ほどの区間を行ったり来たりしたが、見つからずで、ふたたび諦め帰路に就いたら、再び偶然にも道路脇の田んぼで発見。さっそく車を降りて、撮っていると、突然舞い上がりゆっくり羽ばたきながら次第に高度を上げていく（図 3）。まもなく羽ばたくのを止め、円を描きながらさらにみるみるうちに高度を上げていく。明らかに上昇気流（サーマル）にのったようだ。写真はトリミングしている

が実際にはほとんど点のように小さい。今度は次第に高度を下げふたたび戻ってきて、目の前を通過していった。目で追っていると数 100m 先でふたたびぐんぐん上昇し始めた。この間全く羽ばたきもせず大きな翼を広げたまま、まるでグライダーのようにソアリング（滑翔）を楽しんでいるようだ。写真（図 4）で明るくした円に黒い点にみえるのが、コウノトリだ。さらに上昇しながら、突然不思議な動きをした。上体を後ろにそらせまさにバック転宙返りで一回転した。足もぴんと後ろに伸ばしているのではなく、むしろ前にだしているのがわかる（図 5、図 6）。コウノトリは通常図 3 のように、首もまっすぐに伸ばし、足も両足をきちんとそろえて、前後のバランスをとりながら優雅に飛ぶのだが、この時は首も足も縮めて明らかに意識して慣性モーメントを小さくし回転しやすい姿勢で、楽しく遊んでいる様子。その後も上昇気流に乗ってさらに高度をあげていき、ついに肉眼では見えなくなった。



図４　点になりほとんど見えない



図５　バック転宙返りを開始



図６　バック転宙返りを完了

ところで最初に目撃した 2 羽の写真とその場所をピンポイントした GoogleMap 情報を兵庫県立コウノトリの郷公園に当日報告したところ、職員の EY さんから翌日メールで次の情報が届いた。実は各地の協力者からコウノトリ目撃情報が寄せられており、高島への最新飛来情報も届いていた。

「右脚：緑黒、左脚：黒黄」を付けた J0501 というメスの個体。2014 年 6 月に兵庫県朝来市で放鳥された。2015 年 3 月 28 日からここ高島市に滞在中。

「右脚：黒赤、左脚：赤緑」を付けた J0064 というメスの個体。2013 年 4 月に豊岡市百合地地区の人工巣塔から生まれ、2015 年 4 月 3 日からここ高島市に滞在中。

ちなみにバック転を楽しんでいた個体は、写真に写った足環から後でわかったが J0501（メス）だった。このバック転の状況を EY さんに伝え、こうしたことはよくある事かと尋ねたところ、他の職員にも聞いてくれたが、まだ誰もバック転は見たことがないが、コウノトリが遊びでいろんな動きを見せることはあります、とのことだった。なお、EY さんとはその後数年にわたり連絡を取り合い、親切にもコウノトリが滋賀県に飛来するたびにいつもその場所と個体番号を知らせてくれた。その後 2017 年 3 月彼女から丁寧な退職の挨

拶メールが届き、私のことは後任者(KF さん)に伝えたと書かれていたが、その後任者から直接の連絡はなく現在に至っている。

J0501 はその後の EY さんからの情報で、7 月 4 日には豊岡市に戻っていることが確認されたがまたマキノ町に戻っているとのことで、さっそく会いに行き 7 月 8 日に再会できた。さらに J0501 は 8 月 25 日には茨城県笠間市で確認され、そして 9 月 8 日にまたまたマキノに飛来していることが確認された。9 月 11 日にまた J0501 に会いに行った。最初に山裾の道路から双眼鏡で、田んぼを視界の左から右に眺め始めたところ、まるで居場所を教えてくれるかのように、ちょっと背を伸ばし翼を大きく広げてくれたので、直ぐに発見。あの J0501 が元気にしているのを見てホッとするとともにまたまた再会できてうれしかった。



図７　講演会会場

同年 12 月 5 日、兵庫県舞鶴市で兵庫県立コウノトリの郷公園の統括研究部長・江崎保男先生による「コウノトリ野生復帰と生物多様性の保全」と題した興味深い内容の講演があると知り、舞鶴に聴きにいってきた。いろんな興味深い話が盛りだくさんで、2 時間があっという間に過ぎた。例えば、コウノトリは 3 歳から繁殖を開始するが、一夫一妻主義で一度カップルを組むと、一生そのままで、離婚はないそうだ。毎年相手を替えるオシドリとは大違い。ただ、「親による子殺し」も見られ厳しい一面もある。これまで 13 例をみており、平均 13.1 日で殺したとのこと。口減らしのためだそうだ。自然界では十分な食料確保が難しいためか。コウノトリが減ったのは、圃場整備事業がすすみ、水路が放水路に変ってしまい、田んぼに住む淡水魚や水生動物が激減したことが、大きな要因との事。



図８　干上がった川に１羽(左から２羽目)

それから 5 年後、TV ニュースで、すべてのミッションを完遂した JAXA「こうのとり 9 号」が、予定通り 2020 年 8 月 20 日 PM4:07 頃、大気圏に再突入し燃え尽きたことを知り、なにかジーンときた。その「こうのとり 9 号」のニュースを聞いて、突然猛暑もわすれ急に高島に来ているコウノトリを見に行きたくなった。なんでも数日前には群れている 19 羽が目撃されているとのこと。保護の観点からその場所は公開されていないがほぼ推測がつくので、急遽行ってみる事にした。結局この時は川でダイサギやチュウサギなどと一緒にバラバラにいた 4 羽、離れたところの電柱で 2 羽、そして飛翔中の 1 羽が目撃できた（図８，図９）。連日の猛暑にもかかわらずこのあたりに集団でいるという事は、ここは餌を確保しやすいのだろうか。



図９　２羽が電柱にとまっている

さて、今年 2026 年のコウノトリの話。冒頭にも記したが、JR 和邇駅の北東約 150m の田



図 10　７月１日、小雨の中で



図 11　７月３日



図 12　７月９日　この日も猛暑



図 13　７月 10 日　サギだけ

んぼに 1 羽のコウノトリが 7 月頭から約 10 日間にわたり滞在した。その間何度も観に行ったが、いつもほぼ同じところで、半径約 50m 以内の水田にいた。他の場所にくらべ水はけが良くないのか水が多い田んぼで、たぶんそこにはカエルや水生動物が多くいるのかもしれない。7 月 1 日夕方は小雨降るなか傘をさして撮影（図 10）、9 日は 35℃の炎天下で撮影（図 12）。その間も何度か観に行ったが、面白いことにコウノトリを観にあるいは撮りに来ている人は皆無。皆さん、関心がないのか、それとも気が付かないのかはわからないが、おかげで存分に撮れた。ただ 10 日に行ったときは見かけず、それ以降も目にするのは、アオサギ、ダイサギ、チュウサギなどだけだった（図 13）。日々猛暑が厳しくなっていたので、どこか遠方に移動したのかもしれない。

ところでこのコウノトリには足環が付いていなかった。ということは放蝶されたコウノトリが野外でカップルになり、産み、育てた個体と推測できる。おそらく足環のない個体は他にもいて、どこかで元気に生きているのだろう。こうして自然繁殖してコウノトリが増えて行ったらいいのだが、圃場整備が進み、農薬も使われ、餌になる魚や水生動物も少なくなっていては、難しいかもしれない。

コウノトリの郷公園の HP によると、コウノトリも元は日本でも見られたが乱獲や農薬、圃場整備事業などの影響で、1971 年にとうとう日本の空から消えた。1985 年に旧ソ連から 6 羽の幼鳥が寄贈され、そこでペアになったコウノトリによる飼育下繁殖に成功。その後も大事に飼育され、野外への放鳥が行われ、2025 年末現在、野外コウノトリの個体数は 552 羽に達し、今後も増加が期待されている。この夏大津市和邇にやってきた個体も野外で生まれ育った個体だ。

ふと大原のオオムラサキもこのように野外でどんどん増えていってほしいと思った。

大原学院の校舎内で拾った昆虫

藤野 適宏

1. 夏休み中の校舎に入る

2026 年 8 月 5 日、小松清弘さんと私は所用があって夏休み中の京都市立京都大原学院にいた。東校舎 2 階にある第 2 理科室に向って歩いていると、熱気がこもった階段や廊下の随所にオオセンチコガネの死体を見つけた。使用する者がほとんどいない夏休みならではの光景である。階段の踊り場は特に多かった。



図 1　オオセンチコガネ
（小松氏撮影）

オオセンチコガネの死体は多く、12 頭であった（**図 1**）。死体はそれだけにとどまらずトンボやハチ、アブもあった。それらのすべてを拾い集めて、オオセンチコガネとトンボは小松さんが引き取り、他の昆虫は私が持ち帰ることにした。トンボは 2 種 2 頭あったが、そのうちのひとつはタカネトンボと思われたので、私はハタと思い当たることがあり、一旦預かった（帰宅後同定した結果、確かにタカネトンボであった（**図 2**））。もう 1 種は後日、小松さんからヤブヤンマである旨の知らせがあった。



図 2　タカネトンボ
（小松氏撮影）

2. 大原のタカネトンボ

ハタと思い当たることとは 2005 年にさかのぼる。当時、大原で圃場整備が行われることになり、それに先立ってこの年から翌年にかけて環境調査が行われることになった。京都市からの委託を受けて私たち大原のオオムラサキを守る会の初期のメンバーは、昆虫の生息状況を調べた。2006 年までの 2 年間の調査結果は「京都市左京区大原地域環境調査昆虫部門 結果の概観」として京都市に提出した（調査はその後も断続的に続けて現在に至っている）。

提出物の中に「昆虫目録」があり、11 目 95 科 400 種を記録した。それらのほとんどは、我々が現地で採集や目撃したものであるが、一部京都市立大原小学校（当時）の所蔵標本も加えた。それらのほとんどは我々の調査結果と重複するが、1 種だけは現在に至るまで、目撃することさえなかった。それがタカネトンボだったのである。このトンボはびわ湖バレイのルートセンサスでときどき捕獲できる種で、それ故、“タカネトンボはびわ湖バレイほどの標高でないと生息していないのではないか、大原の記録は何かの間違いではないのか”と思うようになっていた。それが今回の発見で、タカネトンボは大原に実際にいることがわかった。大原小学校の所蔵標本はその展翅具合から子供の提出物と考えられたうえに、採集日、採集場所、採集者のラベルがなく、いたって不完全なものであったので、その疑念は高まりつつあった。しかし今回の発見で、その疑念は拭われたのであった。

3. 校舎内の昆虫の特徴

さて、私が持ち帰ったそのほかの昆虫のことである（**図 3**）。ハエを除くすべての同定ができ

た（ハエの同定は難しく、手に負えかねた）。小松さんが持ち帰った種を含めたその一覧が**表 1** である。4 目 9 科 10 種、種名不明 5 である。この表を概観して、校舎で拾った 11 種（5 頭のハエは 1 種としてカウント）は、食性で 2 つのグループに大別できることに気付いた。腐食性昆虫（A）と捕食性昆虫（B）である。それを**表 2** に示した。腐食性昆虫とは腐った動植物や糞などをエサとする昆虫、捕食性昆虫とは成虫がおもに他の昆虫を捕らえてエサとする昆虫である。昆虫の大きなグループである食植性昆虫は 1 種も含まれていなかった。



図 3　私が持ち帰ったそのほかの昆虫

このような結果が得られたのは夏休み中の学校という特別な事情にあると考える。学校には複数のトイレがあり、すべて校舎とは別棟である。それが A のグループの昆虫を引き寄せる。夏休み中といえども教職員は出勤するし児童生徒もやってくるので、トイレ近くの校舎への出入り口は開いている。昆虫が校舎内に迷い込んだら最後、他の出入り口や窓は閉まっているので、出られないまま絶命してしまうのであろう。

表 1　8 月 5 日に拾った昆虫の分類

目名	科名	種名	個体数
蜻蛉目	ヤンマ科	ヤブヤンマ	1
	エゾトンボ科	タカネトンボ	1
鞘翅目	センチコガネ科	オオセンチコガネ	12
双翅目	ミズアブ科	コウカアブ	3
		アメリカミズアブ	1
	アブ科	シロフアブ	1
	ムシヒキアブ科	シオヤアブ	1
	（ハエの仲間）	不明	5
膜翅目	スズメバチ科	オオスズメバチ	1
		セグロアシナガバチ	1
	ベッコウバチ科	ベッコウバチ	1

表 2　8 月 5 日に拾った昆虫のグループ分け

Aのグループ	オオセンチコガネ、コウカアブ、アメリカミズアブ、ハエの仲間
Bのグループ	ヤブヤンマ、タカネトンボ、シロフアブ、シオヤアブ、オオスズメバチ、セグロアシナガバチ、ベッコウバチ

B の昆虫は主にそれらの A の昆虫を捕食するために校舎に入り込み、やはり同様に絶命したと考えられる。夏休みの校舎は巨大な昆虫トラップと化すと考えられる。因みに A の昆虫は 4 種と少ないが個体数は 21 と多く、B の昆虫は 7 種と多いが個体数は 7 と少なく、これは偶然ではないであろう。

4. おわりに

偶然立ち寄った大原学院の校舎で思わぬ拾い物をして、面白い結果を得た。気をよくして、夏休みが終わるまでにもう一度行きたいと考えていたが、気付くとすでに 2 学期が始まってしまっていた。きっと落ちていた昆虫たちは学院生の手で掃き捨てられて、美しい環境で授業が行われていることだろう。

今回の結果には少し疑問が残る。食植性昆虫が全くいなかったことである。校舎が巨大トラップであれば、これらの昆虫も発見できてもおかしくない。現に私自身これまでの経験で、校舎内にチョウが入り込んでくるのを知っている。今後、調査を重ねることができれば、校舎の巨大トラップとしての特徴がより一層明確になることと思う。

大原　いのちの季（とき）　長月

ヒガンバナ

頭を垂れた稲穂が揺れる水田の畦に真っ赤なヒガンバナが目に鮮やかです。真っ青で澄み切った秋空の下、燃えるような赤い花にクロアゲハやカラスアゲハが吸蜜にやって来るのを見るのもいいものです。

ヒガンバナはヒガンバナ科の多年草です。原産地は中国大陸で、有史以前に渡来したと考えられ各地で野生化したようです。北海道から南西諸島までの堤防や土手、畦や道端、墓地など人の手が入った場所で見られます。日本のヒガンバナは遺伝的には３倍体で種ができないので鱗茎（球根）を植えて増やしていったようです。水田の畦や畑の縁に沿って列をなして咲く見事な景観は、毒のあるヒガンバナを植えてモグラやネズミなどの害獣を防ぐ目的で植えられたことで出来上がったようです。

ヒガンバナは有毒植物として有名でリコリンというアルカロイドが含まれています。誤って食べると吐き気や腹痛、下痢を起こします。重症になると死に至る場合もあります。しかし、鱗茎に含まれるリコリンは水溶性ですりつぶして時間かけて水に晒すと無毒化でき食用にすることができました。それで古い時代には飢饉のときに人々を救う救荒作物として植えられたこともあったようです。



ヒガンバナは彼岸の頃に咲くので名づけられたというのが定説ですが、曼殊沙華（まんじゅしゃげ）という別名もあります。ほかに日本全国で 1000 種以上の呼び方があるともいわれています。大原ではどのように呼ばれていたのでしょうか。

近年は白花をはじめとする多くの園芸品種が作り出されリコリスという名前で園芸店に出るようになりました。（文　小松清弘　写真　的場亮一）

＜8 月おもな活動の報告＞

◆8 月 2 日（日）14:00～
○参加者　木村、藤野、的場、小松、大友、計 5 名
○活動内容：特別展示終了・撤収

◆8 月 5 日（水）10:00～、13:30～　（報告者：奥谷）
○参加者　小松、藤野、木村、的場、大友、奥谷、計６名
○活動内容
（午前）網室
・会議　①本日の活動内容　②セブンイレブンフォーラムの参加報告
③特別展示会終了－本日午後反省会　④インセクトフェアーの情報－8.23 開催
⑤8 月の活動日について　⑥頭殻調査について－調査方法、2 齢・3 齢の識別方法
⑦反省会について
・作業　①卵、幼虫の観察　②3 回目の放蝶　③頭殻調査－袋の取り付け、袋替え

④網室外、フジバカマ園内外の除草
（午後）文化センター
・会議　①特別展示会の反省　　②来年度の展示会についてー どのようにするか
③来年度のセブンイレブン助成申請についてー活動内容及び要求物品等

◆8 月 15 日（土）10:00～　（報告者：小松）
○参加者　小松、大友、的場　計　3 名
○活動内容：大原ルートセンサス

◆8 月 18 日（火）12:30～
○参加者　小松、塩尻、木村、的場、大友、奥谷、計 6 名
○活動内容：納涼会（於：Beer thirty）

◆8 月 19 日（水）10:00～13:55　（報告者：大友）
○参加者　大友、小松、的場　計　3 名
○活動内容：びわ湖バレイルートセンサス

◆8 月 26 日（水）10:00～網室、14:00～文化センター　（報告者：奥谷）
○参加者　小松、藤野、塩尻、的場、大友、村上、奥谷、計 7 名
○活動内容
（午前）
・会議　①本日の活動内容
②羽化数調査についてー今年と昨年との対比
雄雌の数ー今年は同じ。生存率ー今年は死亡数少。今年と昨年との違いの原因
③頭殻調査ー袋の取替の方法
・作業　①ルートセンサス　　②頭殻調査ー袋の取替　　③フジバカマ園に散水
④フジバカマ園、網室外の除草
（午後）
・研修；頭殻調査の方法について
・作業；頭殻調査ー取り外した袋から頭殻を取り出して、サンプル瓶内に保管

＝　目　次　＝

大原とびわ湖バレイ　山を越えてつながる自然といのち ····· 1
セブンイレブン記念団体「2026 年度環境市民活動助成フォーラム」報告 ····· 3
コウノトリを追って、自然を想う ····· 5
大原学院の校舎内で拾った昆虫 ····· 9
大原　いのちの季（とき）　長月　　ヒガンバナ ····· 11
8 月おもな活動の報告 ····· 11
目次 ····· 12

発行　大原のオオムラサキを守る会・蓬莱むしの会　　2026 年 9 月 10 日　　第 30 号
H P　大原のオオムラサキを守る会 https://ohara-omurasaki.com/
大原のオオムラサキを守る会代表　〒606-0044　京都市左京区上高野仲町 54　小松清弘
蓬莱むしの会代表　〒520-0105　大津市下坂本 1-40-16　大友正生
編集　〒611-0011　宇治市五ケ庄西川原 21-151　藤野適宏